

遺稿から

王様の好みの顔

和田 奈良子

昔ある国の王様が、大臣を任命するとき、「あの手の顔は嫌だ」と言われたという。総理大臣が「それは無体なことを申される。顔は親から受け継いだもので、当人の責任ではないのではありませんか」と進言したものの、「いや、四十を過ぎたら自分の顔に責任を持つてというではないか」と、聞き入れなかつたそうだから。そんな話を、若い頃何かの本で読んだ。顔については私自身、不満を持つてゐる。幾つ歳を重ねようとも……。

最近、美人がとて多くなつた。平和で豊かになつたせいいか、それが生地のものとも造りものとも分らないが、はつと見返るほどの顔に遭う。

だいたい人間の顔なんて、多少の部品がずれから成り立つてゐるのに、最近では自由にそのずれを直せる手術が出来るようになってきたらしい。

人間の内面的な美しさを見出すのには、時間がかかる。つい表面に出たものだけに惹かれる。私もそうだったため、何度も後悔をしたものだ。

しかし、美しいがゆえに、かえつて鼻持ちならぬものを感じることもある。歳を重ねてくるうち、やつとそう思えるようになった。

王様の言葉を思い出すようになったのは、五十も過ぎた頃だ。

テレビでいろいろな顔を見ることが出来る。「少し嫌味だわ」と気付いたり、逆にだんだん好感が持てるように変わつてくる顔もある。しかし、やはり美しいものに接する方が楽しい。

王様の言つた「あの手の顔は嫌だ」には、大臣として期待する上での何が欠けていたのだつたらうか。

先日、孫の日記を読ませてもらった。

「○○君が、いじわるそうな声で、ボクのことをチビ、のろまと言つた」顔と書かずに声と書いたことに私は噴き出したが、その笑い顔がテーブルの向こうの鏡に映つた。孫のことだけを考へていたひ

とときだ。何とも間の抜けた、それでいて屈託のない自分の顔にまた笑えた。

そういえば、整形された美女の顔と声とにちぐはく感を覚えることがある。声の方まで整形出来ていないのだから。

顔は自分次第で変えていくことが出来る。豊かな表情も顔に現れてくる。

遠い日に「あなたは美しい」と思いがけず、言われたことがあつた。私にはお世辞にしか聞かえず、かえつて遠ざかることになつてしまつた。が、秘かな思いを込めていた私の声や表情が、私を知らずに変えていたのだつたらうか。

当時は、周りにあまりにも生地のままの美人が多すぎた。だから、美しいと言われた言葉に素直になれなかつた。

今でも鏡の中の自分に「もう少しどうにかならないかなあ」と、心の中で背伸びをしてみたりする。見栄えも、表情も美しくなる日がくるのだろうか、とやはり考えずにはいられないのである。

(付記)

作者は平成十七年十二月没(八十二歳)